研究余滴

ジャーディン・マセソン会社文書の利用

西村孝夫*

最近売出しの作家陳舜臣氏の小説『阿片戦争』か，あるいは同氏の『実録アヘン戦争』(中公新書)を読まれた人ならば，ウイリアム・ジャーディンやジェームズ・マセソンというスコットランド系のイギリス人が有名な中国の大臣林則徐と真向から対抗しながら中国にアヘンを密輸するためにマカオ，ホンコン，カントンなどで暗躍したことはよく知っておられると思う。その張本人ジャーディンとマセソンが1832年にマカオに創立し，アヘン戦争のどさくさに乗じてホンコンに本拠を据えたのが他ならぬジャーディン・マセソン会社なのである。会社は，アヘン戦争の勝利・南京条約締結以降，思う存分にアヘンで貿易利潤を儲けて蓄積した上，さらにドック，保険，倉庫，精糖，製氷，電気，酪乳，電車，さらに紡績，機械，銀行の業績に手を拡げ，ついには鉄道や公債を通じて中国の財政，政治にも大きな支配力を揮うに至った。もちろん安政5年の修交通商条約の翌年，日本の横浜にも進出し，いわゆる「英一番館」の異称の下に着実に商権を拡げ，伊藤博文，井上馨などの維新の元勲達のイギリス留学に力を貸し，現在でもその貿易活動を行っている現状にある(大阪府立大学経済研究13巻5号参照)。

こう見てくると，この会社が中国や日本の近世における対ヨーロッパ，とくに対イギリス貿易の歴史に占める比重の大きさが了解できるし，またこの会社の歴史を研究することが東洋史，西洋経済史，経営史，あるいは政治・外交史の上で重要な課題に支えられていることも判明しよう。会社の歴史を研究するための史料としては，会社の設立前後から1935年位までの期間に亙る書簡・帳簿類が一括してイギリスはケムブリッジ大学の中央図書館 (University Library, Cambridge) に所蔵され，これをジャーディン・マセソン会社文書 (The Jardine Matheson Archives) と呼ぶ。これを見さえすれば会社の歴史は何の制約もなくいつでも自由に研究しうるかといえば，なかなかどうして事はそう簡単に運ばない。この文書は公的に大学図書館に寄贈されてはいるのだが，利用については会社の私的な配慮の下におかれている(大阪府立大学経済研究16巻2号参照)。

すなわち，文書利用には，まずロンドンのマセソン会社(会社のロンドンにおけ

* にしむら たかお 大阪府立大学教授

る通信先で，姉妹会社）から許可を受けねばならぬが，その申込書に研究題目，目的，時期などを記入した上，次の諸条件（Conditions of Access）を認めたという意味での署名をせねばならぬ。すなわち，① 利用者の所属機関，上司などの保証を提出する，② マイクロ撮影は厳禁，他の形の複写には予めマセソン会社の同意をえる，③またこの同意のない場合は，文書から引用したり，論著を公表してはならない，④ 文書利用者は整頓と保存とに協力する。これらを認めて署名した者が善意の(bona fide) 利用者として許可される。

会社の歴史の中で最も歴史家にとっても興味を惹かれる部分は，客観的に見てもやはりアヘン密貿易による会社の成長，発展の経路であるが，実は会社側としてはこの部分を余りバクロ的に取扱われては困るという配慮の下に上のような制約を置いている訳で，文書の自由な利用と研究とに強い拘束がおかれているといえる。ましてわれわれ海外の研究者は，会社の歴史を徹底的に研究しようとしても，長期に亙るケムブリッジ滞在の費用と時間とそして忍耐心とに恵まれた上に，さらに研究の公表に対するこうした拘束に耐え，これと対抗する覚悟に徹することが要求されよう。それはともかく，筆者はこの６月中旬から８月末まで，この文書利用の許可を受け，さらに文部省の補助金を受けてケムブリッジに出張・滞在し，その１部を利用することができた。文書も特殊だが，利用の際に通った大学図書館の特別閲覧室も特殊だったので，この文書利用の経験をここに紹介してみたいと思う。

ケムブリッジに到着した翌日，筆者はマセソン会社取締役リード氏の紹介状を携えてこの図書館に出かけた。森と芝生と水とに彩られた緑のクィーンス・ロードを半ば行ったところを左手に折れてバーレルス・ウォークに２百米程入ると，突如として図書館の大きな建物が樹々の間から現われた。広い道路と充分な駐車空間をもつこの建物は，上から見れば丁度「日」の字の形になっており，その日の字の中央前面に50米ばかりの高い塔が立ち，両翼に渡り廊下でつないだ本体より少し低い別棟をもっている。イギリス人好みの渋いえび茶色のタイルで外装されたこの図書館は，新旧混交のケムブリッジ大学の沢山の建築群の中で，いわば新しいタイプの代表格である。1934年当時の金額で巨大な50万磅を投じて建築され，その半額はロックフェラー財団の寄付によるという。

図書館中央の塔の下にある玄関を入って，受付に紹介状を差出すと簡単に図書館利用の入場券を発行してくれ，アンダースン・ルームと聞くと左手に上る階段を示される。この階段の脇の地下に者筆も利用した写真・複写室があって数人の人が作業している。 階段を上がってすぐの廊下を左手へ約50米行きつくと， 突当りが左翼の別棟でその入口にアンダースン・ルームとあり， SILENCE, This Room is Reserved for Readers of MSS and Select Books. という注意書がまず眼に入る。

つまり一般読者は中央玄関の奥にある広い閲覧室を使用し，ここには文書や特殊図書の閲覧者のみが入室を許される。なおついでにアンダースン・ルームの反対側右翼の別棟は２階が地図室，１階が音楽関係の特別室になっており，これもユニークな特別閲覧室であるが，筆者は一度一寸のぞいて見た程度である。

さてこのアンダースン・ルームに入ると，天井まで約10米，巾20米，奥行32米のゆったりした部屋で，約60人席，１人用の革張りの大きな廻転椅子がこれも革張りの机の前に並んで，30人ばかりの人々が静かに閲覧をしている。充分な明りをとっている高いガラス窓の間の側壁は書棚になっており，ざっと見渡して約１万冊のリファレンス・ブックスが置かれている。一角にマイクロ・リーダーが２台，いつでも使用できる状態にあり，読む時に用いる大きな図書でもおける木製の書架が備付けられている。窓からは樹々の緑が見られた。館員は常時３～４人，50歳すぎの主任と若い男女で，何れも書庫まで使用できる鍵を携帯して，交代で勤務についているようであった。

この部屋で筆者の気付いた細かい配慮を述べると，① 電話器のベルが取外してあって，低い機械音が呼出しを告げるようになっていた，② 館員が不用な私語をしないで，すぐ後の控えの部屋で用談していたこと，③ 文書や1801年以前の図書の閲覧時には，鉛筆を用い，インクやボールペンの使用を禁じてあること，④ 書物の運搬に高さ1.2米，巾１米位の木製でがっちりした４輪車が何台でも用いられていたことである。静粛と保存と能率とに配られた配慮であるといえる。一旦借り出した文書，図書は大体毎日リザーブしておくことができ，翌日の仕事に大へん便利であった。

筆者はここで毎日ほぼ同じ顔ぶれの読者達に混じって，ここ10数年来，どうしても自分の眼で確めたかった会社文書の現物を手にして解読に従うことができた。最初の日のその嬉しさは生涯忘れられるものではない。主として安政５年頃から明治維新までの，日本発，日本宛の書簡類と，同じ時期の帳簿類を片っぱしから借出して閲覧した。しかし書簡類といえば25×10×31センチの褐色のボール箱に年代と日付順に納めてあるものを１枚１枚読むのであるが，中には薄っぺらい和紙のような紙にインクの色も薄れた手紙も混っており，また字がはっきりしているものでも何と書いてあるのか判読に苦しむものが多かった。だがこれも不思議なもので，じっと眼をこらして見ている中に，何となく読めてくるのだった。後にロンドンのある展覧会で有名な社会主義者ロバート・オーウェンの書簡をイギリス人さえも完全に判読しえていない事例を知って，変に安心したりもした。帳簿の類は大きいもので45×33センチ位，小さいもので25×35センチ位の何れも革装であるが，表紙のボロボロなのが多かった。しかし内容はきれいな字で，ていねいに書かれてあった。い

わゆる複式簿記でないのが印象的であった。というのはこの会社は1906年になって，やっと株式会社組織に改組され，それまでは古いジョイント・ストック制であった。そういう事情が帳簿にも現われている訳である。

今後新進の学徒で，こういう方面に興味をもつ研究者が費用と時間とをかけてこの文書に取組まれれば，ずい分よい研究成果をあげうることと思われるが，筆者はもはやそうした人の出現を期待する他ない年令に達して了った。丁度筆者がこの特別閲覧室で，よもやこんな特殊なところで仕事をする変な日本人は私一人であろうなどと思っていたら，実は既に日本人の先客が一人あった。慶応義塾大学で中世の英文学を専攻なさっている池上忠弘教授がそれで，中世の英語写本をていねいに毎日のように写しておられる姿には全く敬服せざるをえなかった。1年はケムブリッジで過されたが，現在はオックスフォードに移って，同様な仕事をそこで続行されている筈である。こういう基礎的な作業や仕事を短気な日本人学者は余りやりたがらないが，大切な作業であると思う。そういう意味でアンダースン・ルームでの2ヶ月半はよい経験であった。

（編者注　この文の原稿は昭和46年10月にいただいたものです。）

1973年　春刊行予定

London Bibliography of the Social Sciences

(Compiled by London School of Economics)

Vols. 22–28 coveringe 1968–1971 (7th Supplement)

（概価）　¥ 112,700

既刊

Vols. 1–11　1931–1961（弊社総代理店）¥ 166,400

Vols. 12–21　1962–1968　¥ 164,450

（詳しいカタログをご請求下さい）

（株）紀伊國屋書店

160–91　東京都新宿区新宿３丁目–17–7

ＴＥＬ (03)354–0131 (大代表)